



Title	阻害音の実態から見るモンゴル語アラシャ方言のモンゴル諸語における位置づけ
Author(s)	外賀, 葵
Citation	北方言語研究, 11, 249-266
Issue Date	2021-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/97228
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80935
Type	departmental bulletin paper
File Information	NoLS11_04_249_AoiGEKA.pdf



[資料・研究ノート]

阻害音の実態から見る モンゴル語アラシャ方言のモンゴル諸語における位置づけ

外 賀 葵

(京都大学博士課程/JSPS 特別研究員 DC)

キーワード：モンゴル語アラシャ方言、内モンゴル諸方言、脱オイラト語化、阻害音

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

モンゴル語アラシャ方言は、モンゴル諸語のうち、元来オイラト系諸語（以下、オイラト語）に属するが、内モンゴル諸方言の干渉を受けた結果、オイラト語的特徴の一部を失った、中間的な言語であると考えられる。しかしながら、内モンゴル諸方言の影響がどのように現れ、脱オイラト語化がどのように実現するかについて、従来具体的には論じられていない。本研究では、モンゴル祖語の *k, *č, *j に遡るアラシャ方言の阻害音 K, Č, Ĵ に着目し、筆者の調査データに基づき、音声実現の実態を分析する。その結果、K は本来この方言に想定される閉鎖音よりも摩擦音で実現しやすい傾向にあること、Č, Ĵ には内モンゴルの他方言と同様の実現を示す場合があることを指摘する。このことは、アラシャ方言が内モンゴルの他方言の影響を受けつつ、脱オイラト語化の過程にあることを示唆している可能性がある。ただし、その実証は、今後のより集中的な本調査の結果を俟たなければならないため、本稿はあくまでもそれに向けての暫定的な報告と位置づける¹。

1.2. モンゴル諸語の分類

本稿²で対象とするモンゴル語アラシャ方言（以下、アラシャ方言）とは、モンゴル諸語のうち、中華人民共和国（以下、中国と呼ぶ）の内モンゴル自治区西部に位置するアラシャ盟で話される、モンゴル語の変種の 1 つである。モンゴル諸語は図 1 に示すような分布をしており、破線で囲った部分はアラシャ方言話者が主に居住する地域を指す。本稿では「モンゴル語」をモンゴル国の国語であるハルハ・モンゴル語や中国内モンゴル自治区で話される諸方言を含めた総称として用いる。

¹ 筆者は、中国における新型コロナウイルスの発生直前の時期から約 1 か月間、アラシャ左旗に滞在し、本稿で扱うテキスト読み上げ調査の他に、1 名の話者に対する基礎語彙収集や、特に話者 A（1939 年生れ、女性）を中心とする自然談話の収録を行っている。テキスト読み上げ調査は、中国における新型コロナウイルスの発生直後、外出制限のかかるまでの短い期間を利用して行った。感染防止の観点から、コンサルタントとの対面式の聞き取り調査は回避し、最大限の対策を講じた上でのテキスト読み上げ調査に変更せざるを得なかった。

² 本稿は、日本言語学会第 161 回大会（2020 年 11 月 21～22 日、オンライン開催）での口頭発表「モンゴル語アラシャ方言の阻害音に見られる脱オイラト語化と中間性」に基づき、発表で得られた意見・指摘を踏まえたものである。有益な意見・指摘をしてくださった諸氏に感謝申し上げます。

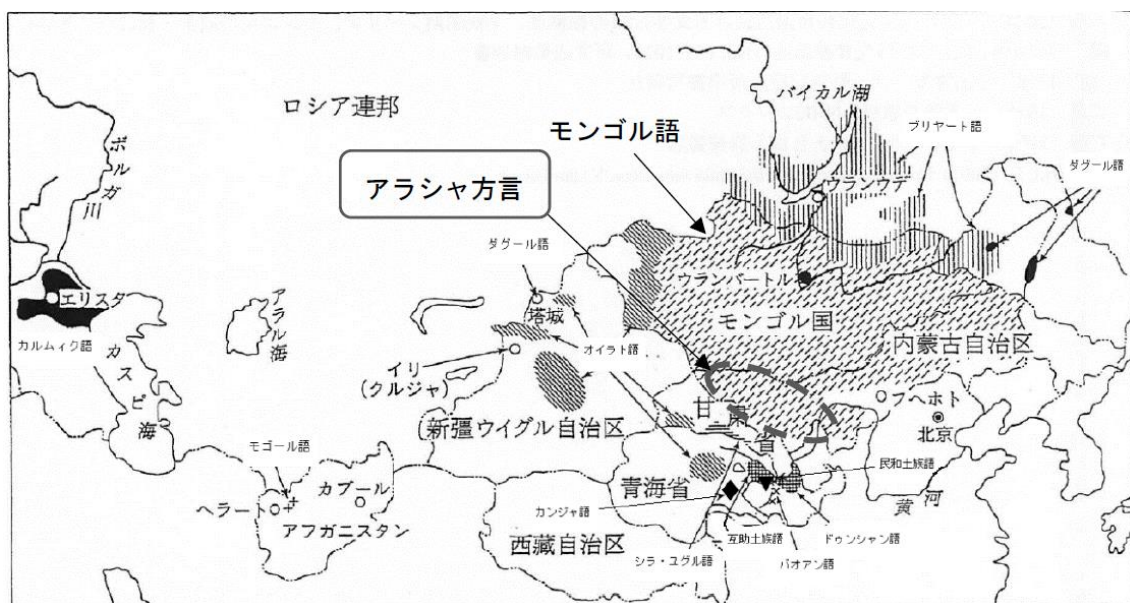


図 1. モンゴル諸語の分布³

斎藤 (2012: 65-66) にも示されるように、モンゴル諸語の分類には諸説あり、系統関係については未だ統一の見解は得られていない。しかしながら、現在話されているモンゴル諸語を、1) 広義の「モンゴル語」⁴、2) 「シロンゴル・モンゴル語」⁵、3) その他 (ダグル語、モゴール語) のように大まかに分類する見解⁶は、一定の共通認識となりつつある。また、蒙古文⁷はモンゴル祖語と完全には一致しないものの、比較的古い時代のモンゴル語の音価の段階を反映したものである。

1.3.節で詳述するが、モンゴル語アラシヤ方言は元来「オイラト語」⁸に属する言語である。本稿では「オイラト語」をオイラト系諸語の総称として用いる。オイラト系諸語としては、モンゴル国のオイラト方言、ロシア連邦カルムイク共和国のカルムイク語、中国新疆ウイグル自治区のオイラト語、中国青海省および甘粛省のオイラト方言等が数えられるが、例えばカルムイク語を個別の言語とするか、オイラト語の方言の一つとして分類するかなどといった点には複数の見解があり、統一的な見地には至っていない (栗林 1988a, 栗林 1988b, Birtalan 2003, 娯娯 [モモ]・孟和阿木古楞 [ムンフアムグレン] 1990 等)。このようにオイラ

³ 斎藤 (2012: 64) をもとに、Janhunnen (2003) 等を参照して筆者が加筆し作成した。

⁴ モンゴル高原を中心に分布する諸語を広く含める場合を指す。ハルハ・モンゴル語や内モンゴル諸方言に加え、オイラト語、ブリヤート語、ハムニガン・モンゴル語などを含む。

⁵ 主に中国の青海・甘粛省地域で話されるモンゴル諸語を指す。ドゥンジャン語、バオアン語、シラ・ユグル語、互助土族語、民和土族語、カンジャ語を含む。

⁶ 例えば、Gutman and Avanzati (2013) 等が挙げられる。

⁷ ウイグル式モンゴル文字 (以下、モンゴル文字) で書かれる言語。栗林 (1989: 1427) によれば、蒙古文語とは、「13 世紀のチンギス汗 (カーン) の時代に、ウイグル時を借りて当時のモンゴル語を表記したもので、以来、700 年以上にわたってモンゴル族の書きことばとして用いられてきた」ものである。また、モンゴル文字による「綴り (語形) は、現代のいずれの口語の発音ともかけ離れており、古風な語形と文法形態をその特徴とする」とある。

⁸ 「オイラト語」はユネスコの消滅危機言語リストにおいて「危険 (definitely endangered)」として分類されている。

ト系諸語は複数の国家・地域に分布しており、現在の話者が主に使用する文字も様々である（表 1 参照）。

表 1. オイラト系諸語の書記に主に使用される文字⁹

国家	地域	呼称	文字
モンゴル国	ホブド県、オブス県	オイラト方言	キリル文字
ロシア連邦カルムイク共和国		カルムイク語	キリル文字
中華人民共和国	新疆ウイグル自治区	オイラト語	トド文字（オイラト文語）
中華人民共和国	青海省、甘肅省	オイラト方言	

1.3. モンゴル語アラシャ方言とは

モンゴル語アラシャ方言は、Birtalan (2003: 211) のように、言語特徴の観点から「オイラト語」の方言の 1 つとして言及されることがあるが、現在は、巴特尔 [バータル], 索德 [ソド] (2009) や格日勒图 [ゲレルト] (2013) 等のように、政治的・地理的観点から、中国内モンゴルのモンゴル語方言の 1 つとして分類されることが多い。本稿でも現在のアラシャ方言は内モンゴル諸方言の 1 つであるという立場を取る。内モンゴル諸方言の分布は図 2 に示す通りである。

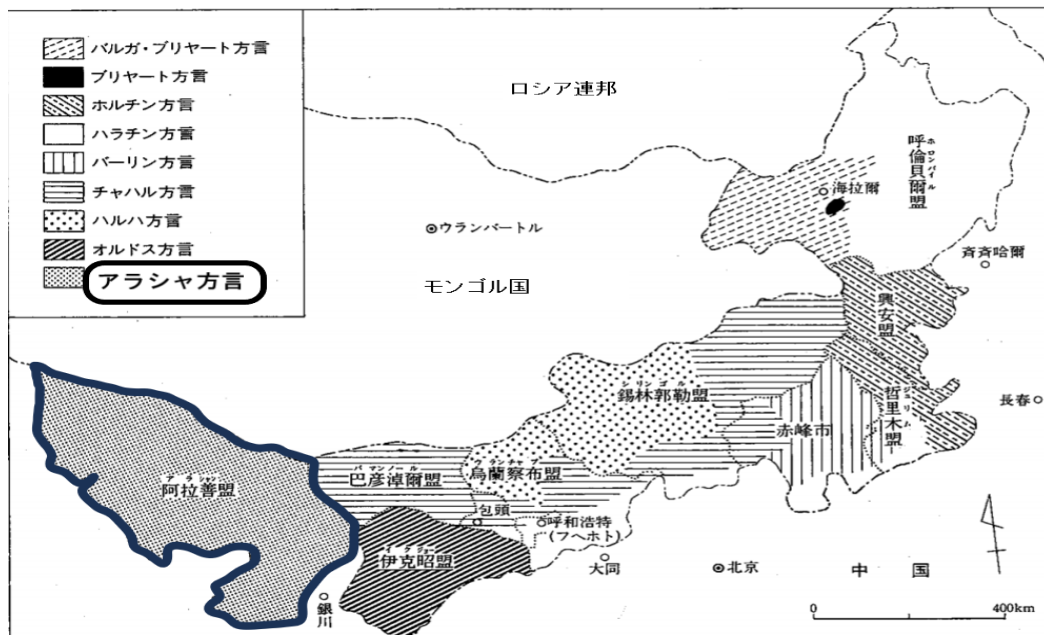


図 2. 内モンゴル諸方言の分布¹⁰

⁹ 塗りつぶし箇所は、現状不明であることを示す。青海・甘肅省を含む中国国内のモンゴル族は、モンゴル文字を使用しているが、話し言葉である「オイラト方言」が書記に用いられることは稀であると推測される。なお「オイラト方言」の書記には、新疆ウイグル自治区と同様にトド文字が用いられている可能性もある。しかしながら、昨今のモンゴル語教育等に関する情勢を鑑みれば、モンゴル文字やトド文字を使用する機会も減少傾向にあると予測されるが、その実態は明らかではない。

¹⁰ 栗林 (1989: 1429) をもとに筆者が加筆し作成した。阿拉善盟（アラシャ盟）には 3 つの旗（西からエズネ旗、アラシャ右旗、アラシャ左旗）から構成される。

本稿では、内モンゴル諸方言のうち、東北部で話されるホルチン方言と中心部に広く分布するチャハル方言¹¹という2つの方言を主に取り上げる。ホルチン方言は内モンゴルでのモンゴル語話者人口が最大の方言であり、内モンゴル諸方言の中でも中国語の影響を強く受けている方言である。チャハル方言は内モンゴルでのモンゴル語標準音とされており¹²、内モンゴル諸方言の中でハルハ・モンゴル語と比較的近いとみなされる方言である。内モンゴルにおけるモンゴル語教育では、「標準音」として制定されたチャハル方言に基づいた教科書が編まれており、その影響は大きい¹³と言える。

モンゴル語アラシャ方言の話者は、アラシャ盟のモンゴル族である。歴史的にアラシャ盟のモンゴル族は、オイラト・モンゴルの民族的起源を持つ¹⁴。中国政府が実施した2019年の人口調査によると、アラシャ盟の総人口は約25万人であり、そのうちモンゴル族は約45,000人である。コンサルタントのコメントも踏まえると、アラシャ方言の話者人口はアラシャ盟のモンゴル族の民族人口を超えることはなく、年々減少傾向にある¹⁵ことが推測されるが、具体的な話者人口については不明である。なお、コンサルタントによれば、中国語の流暢さに差はあるものの、アラシャ方言話者は全員が中国語との二言語話者であるという。

栗林（1988a: 973）によると、モンゴル語アラシャ方言は、内モンゴル諸方言の干渉を受けた結果、オイラト語的特徴の一部を失い、内モンゴル諸方言との「中間的」方言に位置づけられるという。典型的なオイラト語の言語特徴である、述語人称語尾や母音の脱円唇化という特徴がアラシャ方言には見られないことにも言及しているが、それ以上の詳細な記述はなされていない。

アラシャ方言にも見られる内モンゴル諸方言に共通する特徴としては、第一に中国語からの借用が挙げられる。借用される語彙は(1a)に示すような内容語だけでなく、(1b)に示すような機能語にも及んでいる。(1a)は、コロナウイルスの流行初期、本格的な外出制限が施行される前に、春節の挨拶のために、話者が妻の実家を訪れ近況について話している中で聞かれた発話である。[fä:jien]「見つかる」は、中国語の「发现(fāxiàn)」に対応する。(1b)では、中国語の「吧(ba)」に概ね相当する、推論や同意を示す終助詞=baが用いられてい

¹¹ 図2の「ハルハ方言」は、分布する地域の行政名称から、シリングル・ウランチャブ方言と呼ばれることもある。また、フフバートル（2014: 15）には、当該の方言は広義のチャハル方言の一部として分類されるようになっている（清格爾泰 1979: 108 に基づく）とある。

¹² フフバートル（2014: 14-16）によれば、1950年代以降の標準音制定をめぐる論争は、1980年3月31日に内モンゴル自治区政府の公表をもって、「ショローン・フフ（正藍）旗に代表されるチャハルの発音が「標準音」として確定された」とある。ここで言う「標準音」とは、フフバートル（2014: 16）によれば、「実体のない理想の」音として「構築され」たものである。つまり厳密に言えば、内モンゴルでのモンゴル語標準音はチャハル方言の発音をもとに構築された理想の音であるということになる。標準音制定の詳細な経緯については、フフバートル（2014）を参照されたい。

¹³ チャハル方言に基づく標準音の影響としては、もちろんモンゴル語教育だけでなく、メディアでの使用の影響なども考えられる。

¹⁴ フフバートル（2014: 17）によれば、アラシャ盟のモンゴル族は、オイラト・モンゴルからの移住者であり、言語的に本来は「オイラド・モンゴル語に属するホシュード方言とトルゴート方言だった」が、1930年代初めを中心に、モンゴル人民共和国での革命や宗教弾圧から逃れるために、多くのハルハ・モンゴル人がアラシャ盟（とくにエズネ旗）に流入したことが原因で、「ハルハ方言」化が生じたという。

¹⁵ モンゴル族以外の人々（例えば漢族）でモンゴル語を話せる人がいないわけではないが、モンゴル族でもモンゴル語を話せず、中国語のみを話す人が増加傾向にあるため、全体としてモンゴル語話者人口は年々減ってきているということである。

る。

- (1)¹⁶ a. ənə evətʃin arvān dərven ɔdər-ees sār [fäːfɛn]-nä.
 この 病気 十の 四の 日-奪格 いましがた 見つかる-未完了
 「この病気（新型コロナウイルス）はつい2週間前に発見された。」
- b. medə-n=ba.
 わかる-未完了=終助詞
 「わかるでしょ。」

格日勒图 [ゲレルト] (2013: 1) も栗林 (1988a) と同様に、アラシャ方言が本来的にオイラト語 (方言) と同様の特徴を有する一方で、内モンゴル東部のホルチン方言等だけでなく、中部のチャハル方言 (内モンゴルの標準モンゴル語方言) 等の影響も受けていると言及している。しかしながら、内モンゴル諸方言の影響がどのように現れ、脱オイラト語化がどのように実現するかについて、具体的には論じられていない。

1. 4. 本稿の構成

本稿の構成は次の通りである。2 節で先行研究を概観し、その問題点を明らかにする。3 節では筆者の実施した調査の概要を述べる。続く 4 節と 5 節では、モンゴル祖語の *k, *č, *j に遡るアラシャ方言の阻害音 K, Č, Ĵ¹⁷に着目し、音声実現の実態を分析する。4 節では阻害音 K の音声実現の実態から、脱オイラト語化が 50 代以下の話者に顕著であることを指摘した上で、モンゴル祖語の *k, *q の摩擦音化の過程において、アラシャ方言が 1 つの中間的な段階にあることを示す。5 節では、破擦音 Č, Ĵ の音声実現の実態から、内モンゴルの他方言と同様の特徴を持つ例に着目し、言語接触の影響の可能性を指摘したのち、モンゴル祖語の *č, *j の通時的変化の過程において、脱口蓋化による分裂後、一部が口蓋化により中和しているという脱オイラト語化の過程にある可能性に示唆を与える。6 節で議論をまとめ、アラシャ方言がモンゴル諸語において、脱オイラト語化が進行中である中間的な段階に位置づけられる可能性を、K の変化と Č, Ĵ の変化という 2 種類の具体的な現象に基づいて述べる。

2. 先行研究

アラシャ方言の体系的記述を試みたものとしては、格日勒图 [ゲレルト] (2013) があるが、基礎的な記述にとどまっているほか、批判的な検討を行うことなく、伝統的なモンゴル語学の慣習を踏襲しているという問題点がある。方言地理学の観点から、アラシャ方言の地

¹⁶ 本稿で出典の付いていない例は、全て筆者の調査データによるものである。

¹⁷ モンゴル祖語の *k, *č, *j に遡り、蒙古文語の k, č, j に対応する、アラシャ方言の阻害音を、本稿ではそれぞれ K, Č, Ĵ と呼ぶこととする。阻害音 K, Č, Ĵ は通時的な観点を踏まえた音であり、アラシャ方言の共時的音素とは異なるものである。ただし筆者は、阻害音 K に関連するアラシャ方言の固有語の共時的な音素として、母音 [a] の前で対立しうると考えるため、/k/ [k, kx, x] と /χ/ [χ] を想定している。

域差について記述したものにはハス図亜 [ハストヤ] (2011) があるものの、コードスイッチや世代差といった他の社会言語学的観点からの記述や、通時的視点も取り入れた体系的な記述はいまだなされていない。本稿では、通時的視点や世代差の観点を取り入れ、モンゴル祖語の *k, *č, *j に遡るアラシャ方言の阻害音 K, Č, Ĵ に着目し、筆者の調査データに基づいて、音声実現の実態を分析する。

表 2 は、蒙古文語の k のオイラト語および非オイラト語における振る舞いを示したものである。表 3 は、蒙古文語の č, ĵ について、アラシャ方言と他の内モンゴルのモンゴル語方言との対応を示したものである。なお蒙古文語の k, č, ĵ は、モンゴル祖語の *k, *č, *j に遡るものである。

表 2. 蒙古文語の k とオイラト語・非オイラト語との対応¹⁸

蒙古文語	オイラト語	非オイラト語
		(例) ハルハ・モンゴル語
k	k	x
(例)	kereg	xereg 「事、用事」
	kü:kən	xü:xün 「少女」

表 3. 蒙古文語の č, ĵ と内モンゴル諸方言との対応¹⁹

蒙古文語	環境	アラシャ方言	内モンゴルの他方言					
			チャハル	ホルチン	ハラチン	オイラト	バルガ・ブリヤート	ブリヤート
č	母音*iの前	tʃ	tʃ	ʃ	tʃ	tʃ	ʃ	ʃ
	それ以外	ts	tʃ	ʃ	tʃ	ts	s	s
ĵ	母音*iの前	dʒ	dʒ	dʒ	dʒ	dʒ	dʒ	ʒ
	それ以外	dz	dʒ	dʒ	dʒ	z	dz	z

格日勒图 [ゲレルト] (2013) は、蒙古文語の k, č, ĵ に対応するアラシャ方言の音形として、(2) のようであると述べている。

- (2) a. 蒙古文語 k [k]
b. 蒙古文語 č [tʃ] / 母音 i の前 蒙古文語 ĵ [dʒ] / 母音 i の前
[ts~tʃ] / その他の環境 [dz] / その他の環境

(2) について、蒙古文語の k に対して、[k] が対応するという点は、表 2 のオイラト語と

¹⁸ 栗林 (1988a: 972) に基づく。オイラト語及びハルハ・モンゴル語の表記について、長音記号のみを改めた。

¹⁹ 栗林 (1989: 1432) に基づく。アラシャ方言と同様の分布をなすものとしてはハルハ方言が、チャハル方言と同様の分布をなすものとしては、バーリン方言とオルドス方言が挙げられている。

同様の振舞いをなすことを示している。蒙古文語の *č, j* に対しては、母音 *i*²⁰ の前以外で反舌の後部歯茎破擦音である [tʃ] が現れるという点を除いて、表 3 で示した栗林（1989: 1432）のアラシャ方言の分析と同様であると言える。本稿では、(3) に挙げる 2 つの基準に沿って考察を加える。

- (3) a. 蒙古文語の *k* に対応するアラシャ方言の *K* において、閉鎖ありで現れるか
 （閉鎖あり：オイラト語的，閉鎖なし：非オイラト語的）
 b. 蒙古文語の *č, j* に対応するアラシャ方言の *Č, Ĵ* において、母音 *i* の前と母音 *i* の前以外の場合とで振舞いが異なるか²¹

3. 調査概要

筆者は、2020 年 1 月 26 日～27 日の期間にアラシャ左旗にて、10 代から 80 代のアラシャ盟生まれのアラシャ方言話者 8 名（表 4 参照）を対象に、テキストの読み上げ調査を実施した。

使用したテキストは、モンゴル文字で書かれた中高生用のモンゴル語作文の教科書である東北三省蒙古文教材編委会（編）（2009）から選択した、「試験」（pp.202-203, 以下、テキスト 1）と「旧正月」（pp.220-221, テキスト 2）という題目の 2 編と、額尔德尼 [エルデニ]・格日勒玛 [ゲレルマ]（編）（1990: 266）の「十干十二支」（テキスト 3）の 3 つである。なお分析の際には、誤読や読み飛ばし等は除外したため、次節以降で示すデータにおいて話者ごとに総数が異なる場合がある。

表 4. 話者の基本情報

	生年	調査時の年齢	性別
話者 A	1939 年	81 歳	女性
話者 B	1957 年	63 歳	男性
話者 C	1968 年	52 歳	男性
話者 D	1971 年	49 歳	男性
話者 E	1971 年	49 歳	女性
話者 F	1973 年	47 歳	女性
話者 G	1981 年	39 歳	女性
話者 H	2010 年	10 歳	男性

²⁰ 本稿では、単に「母音 *i*」という場合、祖語の **i* に遡る、蒙古文語の母音 *i* を指す。以下同様。アラシャ方言の共時的な音声実現として、[i] 以外でも実現しうるものであることをここに記しておく。

²¹ 通時的な考察をするには、いわゆる「**i* の折れ」を含む議論が不可欠であり、母音 *i* の前とそれ以外といった基準は非常に単純化されたものであることをここに記しておく。本稿では論点が複雑になることを避けるために、この基準を用いて分析を行う。「**i* の折れ」を含む議論については、稿を改めて論じることとする。

4. 阻害音 K の分析

4.1. データ

蒙古文語の k に対応する K の実現について、その出現回数を話者・テキスト別にまとめると表 5 の通りとなる。蒙古文語の k に対応する K は音声的に、閉鎖音 [k], 破擦音 [kx], 摩擦音 [x] という 3 種で実現した。この結果は、格日勒图 [ゲレルト] (2013) が 蒙古文語の k に対応して実現する音声を閉鎖音 [k] のみと記述していた点とは異なる。また、[k], [kx], [x] のうち、世代を問わず、総合的に最も出現回数が多く現れやすいのは、閉鎖音 [k] ではなく摩擦音 [x] であることが見て取れる。破擦音 [kx] の実現について、オイラト語的であるとみなすかには 2 つの立場が考えられうる。オイラト語的特徴を、閉鎖音で現れることとする場合、閉鎖音 [k] のみが該当し、破擦音 [kx] は含まれない。一方、オイラト語的特徴を、閉鎖ありで現れることとする場合、閉鎖音 [k] だけでなく破擦音 [kx] も含むことになる。なお本稿では、一方の立場を取る積極的根拠を持たないために、あえていずれかの立場を選択するということはない。

表 5. K の実現（話者・テキスト別）²²

話者	テキスト1			テキスト2			テキスト3		
	[k]	[kx]	[x]	[k]	[kx]	[x]	[k]	[kx]	[x]
A	13/34	2/34	19/34				3/6	0/6	3/6
B	13/24	1/24	10/24				4/6	1/6	1/6
C	4/34	3/34	27/34	3/25	2/25	20/25	5/6	0/6	1/6
D	0/34	1/34	33/34	2/25	0/25	23/25	2/6	0/6	4/6
E	2/34	1/34	31/34	2/25	0/25	23/25	1/6	0/6	5/6
F	7/34	1/34	26/34	3/24	0/24	21/24	1/6	0/6	5/6
G	4/34	1/34	29/34	3/25	0/25	22/25	1/6	0/6	5/6
H	1/34	2/34	31/34	1/24	0/24	23/24	1/6	0/6	5/6

阻害音 K に見られるオイラト語的特徴である、閉鎖ありで出現する場合の頻度と割合（小数第三位を四捨五入、以下同様）を表 6 に示す。オイラト語的であることを閉鎖音 [k] で現れることとする立場を左方に、閉鎖あり、すなわち閉鎖音と破擦音で現れることとする立場を右方にまとめた。いずれの立場においても、話者 A, B と話者 C~H の間に差異が大きく見受けられる。世代差を踏まえて考察すると、阻害音 K に見られるオイラト語的特徴は、話者 A, B（60 代以上）では約 50% 程度出現した一方で、話者 C~H（50 代以下）では、頻度の高い話者でも 20% 程度の出現にとどまったと言える。

²² 塗りつぶし箇所は、読み上げがなかったことを示す。

表 6. K が閉鎖ありで出現する頻度と割合

話者	[k]の出現		[k],[kx]の出現	
	頻度	割合	頻度	割合
A	16/40	40%	18/40	45%
B	17/30	57%	19/30	63%
C	12/65	18%	17/65	26%
D	4/65	6%	5/65	8%
E	5/65	8%	6/65	9%
F	11/64	17%	12/64	19%
G	8/65	12%	9/65	14%
H	3/64	5%	5/64	8%

続いて、オイラト語的特徴が見られる場合の K の実現において、その出現環境²³について考察を行う。語内の位置（語頭、非語頭）から考察した結果を表 7 と表 8 に、K に後続する母音の種類²⁴から考察した結果を表 9 と表 10 に、それぞれ示す。

表 7 は話者ごとに、阻害音 K と K の現れる語内の位置との関係を表で示したものである。オイラト語的特徴でない、閉鎖なしの場合、つまり摩擦音 [x] で現れる場合も参考として示した。表 8 は、K が閉鎖ありで出現する回数と割合を位置別にまとめたものである。表 8 でも同様に、摩擦音 [x] で現れる場合も参考として示した。

表 7・8 に示した結果から、非語頭に比べて、K の語頭での出現頻度が高いことが分かる。[k] の出現において、語頭の出現率が約 23%であるのに対し、非語頭では約 10%であり、語頭での出現率のほうが高い。[k] および [kx] での出現においても同様、語頭が約 26%であるのに対し、非語頭では約 13%であり、やはり語頭での出現率のほうが高いと言えよう。

次に、直後に現れる母音との関係を示す。表 9 は話者ごとに、阻害音 K と直後の母音との関係を表で示したものである。摩擦音 [x] で現れる場合も参考として示した。表 10 は K が閉鎖ありで出現する回数と割合を母音別にまとめたものである。表 10 でも同様に、摩擦音 [x] で現れる場合も参考として示した。

表 9・10 に示した結果から、e の前や ü, ö の前の場合と比べて、i の前での出現頻度が高いことが分かる。[k] の出現において、i の前での出現率が約 25%であるのに対し、e の前では約 13%、ü, ö の前では約 11%であり、i の前での出現率が比較的高いと言える。[k] および [kx] での出現においても同様に、i の前が約 30%であるのに対し、e の前では約 16%、ü, ö の前では約 13%であり、やはり i の前での出現率が高いと見なすことができる。

²³ 本稿の分析では、テキストのモンゴル文字表記に則して、語内の位置と後続する母音の種類を分類している。

²⁴ モンゴル祖語の *k に遡る蒙古文語の k は、文語の女性母音「i」, 「e」, 「ü, ö」と共起する子音である。「ü」と「ö」は、語彙によっては交替することがあることを踏まえ、本稿では便宜上、まとめて「ü, ö」として扱っている。

表 7. K の出現状況（話者・位置別）

話者		語頭	非語頭
A	[k]	14/16	2/16
	[kx]	0/2	2/2
	[x]	5/22	17/22
B	[k]	12/17	5/17
	[kx]	0/2	2/2
	[x]	3/11	8/11
C	[k]	9/12	3/12
	[kx]	4/5	1/5
	[x]	21/48	27/48
D	[k]	4/4	0/4
	[kx]	1/1	0/1
	[x]	29/60	31/60
E	[k]	3/5	2/5
	[kx]	0/1	1/1
	[x]	31/59	28/59
F	[k]	7/11	4/11
	[kx]	0/1	1/1
	[x]	27/52	25/52
G	[k]	3/8	5/8
	[kx]	0/1	1/1
	[x]	31/56	25/56
H	[k]	2/3	1/3
	[kx]	2/2	0/2
	[x]	30/59	29/59

表 8. K の出現状況（位置別）²⁵

	語頭（239）		非語頭（219）	
	回数	割合	回数	割合
[k]	54	23%	22	10%
[kx]	7	3%	8	3%
[k]+[kx]	61	26%	30	13%
[x]	178	74%	189	86%

²⁵（ ）内の数字は出現回数の総数を示す。なお位置について、語頭・非語頭の別にフィッシャー検定を行った結果、P 値は 0.00129502 (= Sw/ S) であった。

表 9. K の出現状況（話者・母音別）

話者		i	e	ü, ö
A	[k]	6/16	4/16	6/16
	[kx]	1/2	0/2	1/2
	[x]	4/22	8/22	10/22
B	[k]	9/17	3/17	5/17
	[kx]	1/2	1/2	0/2
	[x]	0/11	4/11	7/11
C	[k]	5/12	4/12	3/12
	[kx]	4/5	1/5	0/5
	[x]	15/48	13/48	20/48
D	[k]	0/4	1/4	3/4
	[kx]	0/1	0/1	1/1
	[x]	24/60	17/60	19/60
E	[k]	2/5	2/5	1/5
	[kx]	1/1	0/1	0/1
	[x]	21/59	16/59	22/59
F	[k]	8/11	3/11	0/11
	[kx]	1/1	0/1	0/1
	[x]	15/52	14/52	23/52
G	[k]	8/8	0/8	0/8
	[kx]	1/1	0/1	0/1
	[x]	15/56	18/56	23/56
H	[k]	3/3	0/3	0/3
	[kx]	0/2	1/2	1/2
	[x]	21/59	16/59	22/59

表 10. K の出現状況（母音別）²⁶

	i (165)		e (126)		ü, ö (167)	
	回数	割合	回数	割合	回数	割合
[k]	41	25%	17	13%	18	11%
[kx]	9	5%	3	2%	3	2%
[k]+[kx]	50	30%	20	16%	21	13%
[x]	115	70%	106	84%	146	87%

²⁶ () 内の数字は出現回数の総数を示す。なお母音について、i の前、e の前、ü, ö の前にフィッシャー検定を行った結果、P 値は 0.00116245(= Sw/ S) であった。

以上に見たように、本節では、蒙古文語の *k* に対応するアラシャ方言の阻害音 *K* の音声実現について、まず *[k]*, *[kx]*, *[x]* の3つが認められることを示し、そのうち最も出現頻度が高いのは、閉鎖音 *[k]* ではなく摩擦音 *[x]* であることが明らかとなった。次にオイラト語的特徴について、世代差の観点から見れば、60代以上の話者2名では約50%出現した一方で、50代以下の話者6名では、頻度の高い話者でも20%程度の出現にとどまることが分かった。さらに、オイラト語的特徴が実現した場合の出現環境から考察を加え、語頭や母音 *i* の前では実現されやすいのに対して、非語頭や母音 *e* および母音 *ü*, *ö* の前では実現されにくいという傾向を示した。

4.2. モンゴル諸語との比較

栗林(1992b, 1992c)や孫竹(主編)(1990)等により、**k*, **q* の通時的変化を簡略化して示すと図3のようになる。なお **q* は男性母音と共起、**k* は女性母音と共起する子音である。祖語の **q* に遡るアラシャ方言の音は *[χ]* であり、常に摩擦音として実現する。

	【*k, *qの両方が閉鎖音】	【*k, *qの一部が摩擦化】	【*k, *qの両方が摩擦化】
	タイプ1	タイプ2	タイプ3
*k	閉鎖音	閉鎖音	摩擦音
*q	閉鎖音	摩擦音	摩擦音
(言語例)	ドゥンシャン語	オイラト語	ハルハ・モンゴル語
	モゴール語	互助土族語	

図3. **k*, **q* の通時的変化

タイプ1は、**k*, **q* に遡る音の両方が閉鎖音で現れるタイプであり、例としてドゥンシャン語やモゴール語が挙げられる。タイプ2は、**k*, **q* に遡る音の一方が摩擦音で現れるタイプであり、**k* が閉鎖音、**q* が摩擦音として現れるタイプで、例としてオイラト語や互助土族語が挙げられる。**k*, **q* に遡る音の一方が摩擦音で現れるタイプを想定する場合、**k* が摩擦音、**q* が閉鎖音として現れるタイプも考えられるが、このようなタイプに属するモンゴル諸語の例は確認されていない。タイプ3は **k*, **q* の両方が摩擦音で現れるタイプであり、例としてはハルハ・モンゴル語が挙げられる。

4.1.で述べたように、アラシャ方言の *K* は、閉鎖音として現れる場合が残っているものの、その多くは摩擦音として実現した。この事実は、少なくとも調査の結果から見る限りでは、アラシャ方言が元来はオイラト語と同様のタイプ2に位置していたが、現在ではタイプ3へ移行しつつある、即ち脱オイラト語化が進行しているということを示していると考えられるかもしれない。

5. 破擦音 *č*, *ǰ* の分析

5.1. データ

蒙古文語の *č*, *ǰ* に対応するアラシャ方言と内モンゴルの他方言との対応は、表3に見た通りである。

表 3. 蒙古文語の č, ĵ と内モンゴル諸方言との対応（再掲）

蒙古文語	環境	アラシャ 方言	内モンゴルの他方言					
			チャハル	ホルチン	ハラチン	オイラト	バルガ・ブリヤート	ブリヤート
č	母音 <i>i</i> の前	tʃ	tʃ	ʃ	tʃ	tʃ	ʃ	ʃ
	それ以外	ts	tʃ	ʃ	tʃ	ts	s	s
ĵ	母音 <i>i</i> の前	dʒ	dʒ	dʒ	dʒ	dʒ	dʒ	ʒ
	それ以外	dz	dʒ	dʒ	dʒ	z	dz	z

格日勒图 [ゲレルト] (2013) は、Č, Ĵ の異音について (4) のようであると述べる。本節では Č, Ĵ の実現について、母音 *i* の前とその他の環境という 2 つの環境別に考察を加えてゆく。

- (4) Č [tʃ] / 母音 *i* の前 Ĵ [dʒ] / 母音 *i* の前
[ts~tʃ] / その他の環境 [dz] / その他の環境

表 11 は Č の実現について、調査結果をまとめたものである。

表 11. Č の実現（話者別）

話者	i の前		i の前以外	
	[tʃ]	[ʃ]	[ts]	[tʃ]
A	23/24	1/24	7/7	0/7
B	16/16	0/16	4/4	0/4
C	33/35	2/35	15/18	3/18
D	34/34	0/34	18/18	0/18
E	35/35	0/35	18/18	0/18
F	35/35	0/35	17/18	1/18
G	35/35	0/35	15/18	2/18
H	35/35	0/35	15/18	2/18

表 11 において、母音 *i* の前での Č の実現において注目すべき点（太枠部分を参照）は、まず話者 A, C に、[tʃ] ではなく [ʃ] が現れる、ホルチン方言と同様の特徴を持つ例 (5)²⁷が観察されたことが挙げられる。

- (5) [i の前で [tʃ] ではなく [ʃ] が現れる例]

a. ič*ī*-jü [iʃidʒ]

恥じるーて 「恥じて」 （話者 A・話者 C に各 1 例）

b. xüč*ī*rde-xü [xuʃirdəx]

困難だと感じる一連体語尾 「困難だと感じる（こと）」（話者 C に 1 例）

²⁷ モンゴル文字の転写表記は『蒙汉词典』（2018）による。以下同様。

また母音 i の前以外での Ć の実現について見れば、話者 C, F, G, H に、[ts] ではなく [tʃ] が現れる、チャハル方言と同様の特徴を持つ例 (6) も注目すべき点と言える。

(6) [i の前以外で [ts] ではなく [tʃ] が現れる例]

- a. čayala-xu [tʃäga:lax]
年を越すー連体語尾 「年を越す (こと)」 (話者 H に 1 例)
- b. xečegüü [xetʃu:]
難しい 「難しい」 (話者 C・話者 H に各 1 例)
- c. čayan [tʃäga:n]
白い 「白い」 (話者 C に 2 例)
- d. čayayčın [tʃäqagtʃın]
辛 (かのと) 「辛 (かのと)」 (話者 G に 1 例)
- e. emüs-čege-n [ømøstʃuge:n]
身に付けるー皆が…するーて「皆が身に付けて」 (話者 G に 1 例)
- f. χubčasu [χovtʃäs]
服 「服」 (話者 F に 1 例)

表 12 は Ĵ の実現について、調査結果をまとめたものである。Ĵ の実現についての注目すべき点 (表 12 の太枠部分を参照) としては、母音 i の前以外の環境で、話者 B, E, G, H に [dz] ではなく [dʒ] が現れる、チャハル方言やホルチン方言と同様の特徴を持つ例 (7) が観察されたことが挙げられる。

表 12. Ĵ の実現 (話者別)

話者	iの前	iの前以外	
	[dʒ]	[dz]	[dʒ]
A	2/2	13/13	0/13
B	2/2	6/10	4/10
C	7/7	19/19	0/19
D	7/7	19/19	0/19
E	7/7	18/19	1/19
F	7/7	19/19	0/19
G	7/7	18/19	1/19
H	7/7	18/19	1/19

(7) [i の前以外で [dz] ではなく [dʒ] が現れる例]

a. <u>ᠵ</u> ii	[<u>dʒ</u> ui]		
規則		「規則」	(話者 B に 1 例)
b. <u>ᠠᠵ</u> e-bel	[<u>udʒ</u> uwel]		
見る一れば		「見れば」	(話者 B に 1 例)
c. <u>ᠠᠵ</u> e-ged	[<u>udʒ</u> e:d]		
見る一て		「見て」	(話者 B に 1 例)
d. <u>ᠵ</u> arliyda-ba	[<u>dʒ</u> ärligdaɪ]		
命令する一た		「命令した」	(話者 B・話者 G・話者 H に各 1 例)
e. <u>ᠵ</u> alayučud	[<u>dʒ</u> älo:tʃu:d]		
若者		「若者」	(話者 E に 1 例)

注 1 にも記したように、今回の調査ではコロナ禍による制約があり、十分なデータが収集できなかったため、過度な一般化は避けなければならない。また、コンサルタントの数も少ないために、表 11・12 を通して注目すべき点として挙げてきた以上の現象は、イディオレクトである可能性も否定できない。しかしその一方で、この地域の歴史のおよび社会的背景を踏まえれば、栗林 (1988a: 973) や格日勒图 [ゲレルト] (2013: 1) も指摘しているように、アラシャ方言が、ホルチン方言やチャハル方言といった、内モンゴルの他方言との接触の影響を受けていることは予想できる。

ここで、そのような可能性を考える上で示唆的な歴史的背景について、簡略に記しておく。宮脇 (2018: 136-213) によれば、清朝時代、その官僚や貴族として、満洲人だけでなくモンゴル人も多く存在していた。上流階級にあったモンゴル人の中で、大きな割合を占めていたのはホルチン・モンゴル人であった。清朝政府が西モンゴル地域を統治するために、政治的・経済的・軍事的に重要な拠点としたのはアラシャ地域であり、アラシャ地域は他のモンゴル地域とは異なり、理藩院によって直轄地と定められていた。これらの事実から、西モンゴル統治の拠点であるアラシャ地域に、官僚貴族であるホルチン・モンゴル人が一定期間滞在しており、その間に言語の接触が起きたという説明が可能である。内モンゴルの東北部に位置するホルチン方言地域と、内モンゴルで最も西側に位置するアラシャ地域は、地理的にかなり離れており、一見すると影響を受ける可能性は考えにくい。しかし、上述した歴史的背景を踏まえれば、とりわけより上の世代のアラシャ方言話者の例においてホルチン方言の影響が見られることへの説明として、アラシャ方言のホルチン方言との言語接触の可能性は否定できない。

チャハル方言についても同様に、接触の可能性を考える上で示唆的な社会的背景として、モンゴル語の標準音教育の影響が考えられる。標準音とチャハル方言とは完全に一致するわけではないものの、1.3.でも述べたように、標準音はチャハル方言に基づいて定められたため、チャハル方言と共通する部分の占める割合が非常に大きい。とりわけ今回の調査が、モンゴル文字で書かれたテキストの読み上げ調査であるという点も踏まえておく必要があるだろう。一般にテキスト読み上げ調査では、テキストを方言で読むことに慣れていない（あるいはそういった習慣のない）話者に対する調査である場合は特に、対象の方言での読

み方ではなく、標準的な読み方がなされやすい傾向があると考えれば、チャハル方言と同様の特徴を持つ例が確認されたとしても不思議ではない。

5.2. モンゴル諸語との比較

栗林 (1992a, 1992b, 1992c)、孫竹 (主編) (1990) や Skribnik (2003) に基づき、アラシヤ方言に関する筆者の解釈を踏まえて *č, *j の通時的変化を暫定的に示すと図 4 のようにまとめられる。図 4 にはタイプ A~D の 4 つのタイプを示しているが、*č, *j の一部が脱口蓋化を起こしたことによる分裂が見られるかという点から、分裂の生じていないタイプ A と分裂の生じているタイプ B~D に大別できる。

タイプA	【脱口蓋化による分裂なし】	*č, *j → tʃ, dʒ	①: 脱口蓋化 ②: 口蓋化 ③: 摩擦化	チャハル方言, ホルチン方言
タイプB	【脱口蓋化による分裂あり】	*č, *j ① → tʃ, dʒ → ts, dz(z)		ハルハ・モンゴル語, オイラト語
タイプC	【脱口蓋化による分裂後、一部が口蓋化により中和】	*č, *j ① → tʃ, dʒ → ts, dz → ② → tʃ, dʒ → ts, dz		アラシヤ方言
タイプD	【脱口蓋化による分裂後、それぞれ摩擦化】 ※摩擦化→脱口蓋化の可能性は低い	*č, *j ① → tʃ, dʒ → ts, dz → ③ → ʃ, ʒ → s, z		ブリヤート語

図 4. *č, *j の通時的変化

タイプ A は、*č, *j の両方を保存し、脱口蓋化による分裂が生じていないタイプである。例として、チャハル方言やホルチン方言が挙げられる。タイプ B は脱口蓋化による分裂が生じたタイプであり、ハルハ・モンゴル語やオイラト語がこのタイプに属する。タイプ D は脱口蓋化による分裂が生じた後で、それぞれが摩擦化したタイプであり、例としてブリヤート語が挙げられる。

アラシヤ方言について言えば、本来はオイラト語と同様のタイプ B に属していたと推測されるが、5.1.で示したように、i の前以外の環境で後部歯茎摩擦音の [tʃ] や [dʒ] が現れる例があったことを踏まえると、脱口蓋化による分裂が生じた後に、言語接触等の要因で、一部が口蓋化し中和しているタイプであると言える。アラシヤ方言の状態は、タイプ B に近いものの、一部が中和を起こしている点でタイプ B と同様ではない。一方で、口蓋化による一部の中和という変化は、タイプ D に見られるようなそれぞれの摩擦化ほど完全に生じているものでもない。したがって、タイプ B とタイプ D の間にタイプ C として位置づけることが妥当であると思われる。

6. おわりに

本稿では、従来具体的に論じられていなかったアラシヤ方言の脱オイラト語化と内モンゴル諸方言の影響について、モンゴル祖語の *k, *č, *j に遡るアラシヤ方言の阻害音 K, Č, Ĵ に着目し、音声実現の実態から、K の変化と Č, Ĵ の変化という 2 種類の具体的な現象に基づいて考察を加えた。

まず阻害音 K の音声実現の実態から、脱オイラト語化が 50 代以下の話者に見られることを指摘した上で、モンゴル祖語の *k, *q の摩擦音化の過程において、アラシャ方言が 1 つの中間的な段階にある可能性を指摘した。次に破擦音 Č, Ĵ の音声実現の実態から、内モンゴルのチャハル方言やホルチン方言等と同様の特徴を持つ例に着目し、言語接触の影響の可能性を指摘したのち、モンゴル祖語の *č, *j の通時的変化の過程において、脱口蓋化による分裂後、一部が口蓋化により中和しているという脱オイラト語化の過程にあるという仮説を提示した。

今後は、破擦音 Č, Ĵ の分析の際に論点の複雑化を避けるために扱わなかった「*i の折れ」の議論を踏まえた分析、テキスト読み上げ調査の欠点を補うことができる自然談話データに基づく分析、さらに音響音声学的観点からの分析を進め、仮説の検証を行いたいと考える。

謝辞

本稿は、JSPS 特別研究員奨励費 19J20571 の助成を受けている。調査に協力してくださった話者の方々と、有益な助言をくださった角道正佳氏、大竹昌巳氏をはじめとする諸氏、加えて貴重な時間を割いて丁寧に指摘をしてくださった匿名の査読者 2 名の方々に、末尾ながら心からの謝意を表する。なお本稿における全ての誤謬は筆者に帰するものである。

参考文献

- Alejandro, Gutman and Avanzati, Beatriz (2013) The language gulper: An insatiable appetite for ancient and modern tongues. <http://www.languagesgulper.com/eng/Mongolic.html> [accessed January 2021]
- 巴特尔, 莫・波, 索德 (2009) 『蒙古语方言学』呼和浩特: 内蒙古大学出版社.
- Birtalan, Ágnes (2003) Oirat. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 210-228. London and New York: Routledge.
- 东北三省蒙古文教材编委会 (编) (2009) 『中学生蒙古语语法写作基础知识』沈阳: 辽宁民族出版社.
- 額尔德尼・格日勒玛 (编) (1990) 『蒙古语常用词汇』乌鲁木齐: 新疆人民出版社.
- 格日勒图, 纳 (2013) 『阿拉善土语研究』呼和浩特: 内蒙古人民出版社.
- 哈斯图亚 (2011) 「阿拉善土语语言地理研究」硕士论文, 内蒙古大学.
- フフバートル (2014) 「内モンゴルにおける「現代モンゴル語」の形成過程とその政治的側面—モンゴル人民共和国からの影響に焦点を当てて—」『學苑』883: 1-22.
- Janhunen, Juha (2003) Mongol dialects. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 177-192. London and New York: Routledge.
- 栗林均 (1988a) 「オイラト語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上)』971-974. 東京: 三省堂.
- _____ (1988b) 「カルムイク語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上)』1300-1306. 東京: 三省堂.
- _____ (1989) 「内蒙古語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 (中)』1426-1434. 東京: 三省堂.

- _____ (1992a) 「ブリヤート語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第3巻 世界言語編 (下-1)』 814-827. 東京：三省堂.
- _____ (1992b) 「モンゴル語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第4巻 世界言語編 (下-2)』 501-517. 東京：三省堂.
- _____ (1992c) 「モンゴル諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第4巻 世界言語編 (下-2)』 517-526. 東京：三省堂.
- 宮脇淳子 (2018) 『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』, 増補新版. 東京：刀水書房.
- 嫫嫫, S・Y, 孟和阿木古楞 (1990) 『现代蒙古语及其方言』 呼和浩特：内蒙古教育出版社.
- 内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所編 (2018) 『蒙汉词典』, 增订本. 呼和浩特：内蒙古大学出版社.
- 清格爾泰 (1979) 「中国蒙古語方言劃分 (下)」 『民族語文』 1979 年第2 期：108-112.
- 斎藤純男 (2012) 『モンゴル語史研究入門』, 草稿 2012 年版. 東京学芸大学.
- Skribnik, Elena (2003) Buryat. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 102-128. London and New York: Routledge.
- 孙竹 (主编) (1990) 『蒙古语族语言词典』 西宁：青海人民出版社.

The Status of the Alasha Dialect of Mongolian within Mongolic as Analyzed Through Obstruents

Aoi GEKA

(Kyoto University / JSPS Research Fellow DC)

The Alasha dialect of Mongolian, which originally was an Oirat language, is described in the literature as having partially lost its Oirat features (a process referred to as de-Oiratization in this study) and evolved into an interlanguage due to the interference of Inner Mongolian dialects. However, previous studies have not discussed the influence of Inner Mongolian dialects and the realization of de-Oiratization in detail. This study focuses on the obstruents K, Č, and Ĵ in the Alasha dialects, which date back to *k, *č, and *j in Proto-Mongolian, and analyzes their phonetic realization based on my own survey data. The results show that K is more frequently realized as a fricative than a plosive and that occasionally Č and Ĵ are realized identically with other Inner Mongolian dialects. This study reveals that among the Mongolian languages, the Alasha dialect is in an intermediate stage of de-Oiratization.

(げか・あおい takenoko2451@gmail.com)